

平成 21 年 4 月 14 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2008

課題番号：19791733

研究課題名 (和文)

慢性疾患患児の父親のコーピングに関する研究—コーピング尺度の作成—

研究課題名 (英文)

The study of the coping of father who has the child of the chronic disease
-The making of the coping scale-

研究代表者

納富 史恵 (NOUDOMI FUMIE)

久留米大学医学部看護学科・助教

研究者番号：60421301

研究成果の概要：

本研究は、慢性疾患で入院している子どもを持つ父親が、子どもの入院や入院生活が長期化する中でもたらされるストレスに対してどのようにコーピングしているかを測定するための尺度の開発を行い、父親に対するケアの示唆を得ることを目的として研究を行った。

本研究において、父親は社会資源探求コーピングをとる傾向にあり、また母親は、情緒的支援コーピングをとる傾向にあることが明らかとなった。

また、作成したコーピング質問紙の信頼性・妥当性を確認するため、アンケート調査を実施した。研究対象者の確保が難しかったため（回収率 27.4%、有効回答率 88.2%）、今後も引き続き対象者の数を増やしていき、質問紙の信頼性・妥当性を確認していく必要がある。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	500,000	0	500,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	210,000	1,410,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学

キーワード：小児看護学

1. 研究開始当初の背景

2005 年～2006 年に発表された文献を「医学中央雑誌」から検索した結果、病児の父親の研究が増加している。これまで小児看護においてケアの対象は、病児と母親に集中することが多かったが、父親に対してもケアの必要性を感じ、目が向けられるようになってきたことが推察される。

病児を持つ父親のストレスには、「子どもの病気への不安、付き添いをしている妻の疲

労や生活に対する心配、子どもの将来に対する不安、仕事と家事の両立に関する負担、きょうだい児の世話への負担」があり、これらのストレスに対して父親は独自の方法でコーピングしていることが考えられる。

小児の家族に関するコーピング尺度の開発はいくつかみられるが、先行研究における男性特有のコーピング行動（飲酒・喫煙など）が入っていないため、不向きであると考えられる。

子どもが入院することで父親はさまざまなストレスを感じ、独自の方法でコーピングするが、このコーピングを測定するための尺度は存在しない。コーピングを測定することは、父親を側面的にサポートするために必要なことであるため、入院している子どもを持つ父親のコーピング尺度の開発が必要であると考える。

2. 研究の目的

慢性疾患で入院している子どもを持つ父親が、子どもの入院や入院生活が長期化する中でもたらされるストレスに対してどのようにコーピングしているかを測定するための尺度の開発を行い、父親に対するケアの示唆を得ること

3. 研究の方法

【2007年度】

半構造化面接による内容分析と文献や Lazarus & Folkman の理論を基に父親のコーピング質問紙を作る。

(1) 調査対象

K 大学病院の小児科病棟に慢性疾患（小児慢性特定疾患・特定疾患）で入院している子どもの父親 9 名。

(2) 面接場所

K 大学病院小児科病棟の面談室

(3) 面接方法

面接はインタビューガイドを用いた半構造化インタビューを行った。

(4) データの分析方法

面接内容は逐語録におこし、データとした。逐語録の中から父親のコーピングが表出されている部分を抽出し、コード化した。

【2008年度】

2007 年度作成したコーピング尺度を使用しアンケート調査を実施。尺度の信頼性・妥当性の検討を行う。

また、この作成した尺度が父親に特化したものであるかを見ていくために、ゴールドスタンダードを使用して、父親と母親のコーピング行動の比較を行う。

(1) 研究対象

全国の大学病院、国立病院機構、500床以上を有する病院からランダムサンプリングした301施設中、研究への同意を得た31施設に慢性疾患で入院している子どもを持つ父親75名（回収率27.4%、有効回答率88.2%）、母親89名（回収率32.7%、有効回答率97.8%）

(2) アンケート調査方法

質問紙の配布は病棟責任者（医長あるいは看護師長）へ依頼し、回収は記入後各自で返信用封筒に入れて郵送してもらうよう依頼した。

(3) 調査内容

①2007年度に作成したコーピングの質問紙

②ゴールドスタンダード：藤原 千恵子が開発し信頼性と妥当性が検証された「入院児の家族のコーピング尺度」を用いた。この尺度は、33項目8因子（問題焦点・情緒支援・楽観思考・医療者支援、思考回避・情緒安定・自責・社会資源探求コーピング）から構成されており、「とても当てはまる」（4点）から「全く当てはまらない」（1点）の4段階リッカートスケールで回答を求めた。

(4) 分析方法

統計処理には、SPSS17.0 J for Windows を使用した。

ゴールドスタンダードにおける父親・母親の2群間比較はt検定、また多群間比較は一元配置分散分析を行った。

また、作成した尺度は、主成分分析を行い、尺度の信頼性はクロンバック α 係数で内部一貫性を検討した。

4. 研究成果

1) ゴールドスタンダードでの父親と母親のコーピング行動の比較

ゴールドスタンダードでの8因子において父親と母親を比較したところ、情緒的支援コーピング得点は母親が父親よりも有意に高く（ $p=0.014$ ）、また、社会資源探求コーピング得点は、父親が母親よりも有意に高かった（ $p=0.049$ ）

2) 作成した質問項目

42項目を主成分分析（天井効果、フロア効果のあった変数と、因子負荷量の小さい変数を除く）で解析した結果、23項目7因子に分類できた。第1因子は、「自分にもできることはないかと考えた」など11項目が含まれ「問題への取り組み」と命名した。第2因子は、「あまり深く考えないようにした」など5項目が含まれ「楽観思考」、第3因子は、「病気を信じようとしなかった」など3項目が含まれ「問題からの逃避」、第4因子は、「今までより健康的な生活を送るように努力しようと思った」の1項目で「認知の転換」、第5因子は、「子どもにとって入院体験は貴重な体験であると思った」の1項目で「プラス思考」、第6因子は、「子ども（病児・きょうだい児）に励まされた」の1項目で「ソーシャルサポート」、第7因子は、「なるべく平静を装った」の1項目で「自己統制」と命名した。尺度の信頼性をみるため、クロンバック α 係数を用いた結果、総合的に0.701であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 件)

[学会発表] (計 1 件)

- ① 慢性疾患患児の父親のコーピング行動,
第 34 回日本看護研究学会学術集会
[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

○取得状況 (計 件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

納富 史恵 (NOUDOMI FUMIE)

久留米大学医学部看護学科・助教

研究者番号：60421301

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者